東方癒式猫

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方癒式猫

【Ｎコード】
Ｎ２２７５ＢＡ

【作者名】
霧夜

【あらすじ】
ある日、なぜか白い猫又に転生してしまった主人公。彼は、東方の世界で何をして、誰と会い、何を思うのか？
東方の二次創作小説です。キャラ崩壊、オリキャラ介入などなど、二次創作要素満載です。苦手な方は、ブラウザバックをおすすめいたします。

プロローグ（前書き）

また、ＫＳみたいな小説を書いてしまった。

プロローグ

「ここどこ？」
そんなことを呟く僕は、・・・えっと・・・名前なんだっけ？
まったく思い出せない。何でこの森の中にいる前の記憶がないんだ？・・・へ、なにこれ？新手の嫌がらせ？それとも、何かのテンプレか？・・・とりあえず落ち着こう。もちつこう。それよりも、気になるのは・・・。
「とりあえず・・・。のど渇いたし、水を探すか。」
そんな事を言いながら水を探し始める僕。本当にのどが渇いた訳ではない。ただ単に落ち着きたかったのである。

見つけた。どうやら湖のようだ。周りは、草木に囲まれている場所だ。
「うん。水美味いけど・・・。何で猫になってるんだ？」
さっきから、どうも視線が低いと思ったんだよね。どうやら白い猫のようだ。しかも・・・。
「尻尾が二本あるんですけど・・・。」
思い当たるのは、『猫又』

『猫又』

猫股とも書く。年を取った飼い猫が変化（へんげ）した妖怪。
葬儀場や墓場から死体を盗み、その人間になり替わったりする。
黒猫の猫又が最強と言われる。
普通の猫の姿をしているが、扉の開け閉めが両方できる猫が猫又と言われる妖怪である。

「・・・まぁ、僕は、白だから最強じゃない訳だ・・・。まぁ、

人間だった時も平和主義を貫いてたからちょうどいいか。」
そんなこんなで僕の妖怪ライフは、始まりを告げたのであった。

プロローグ（後書き）

短いですねｏｒｚ誤字脱字などありましたらお気軽にお寄せください。

鬼さんですか、そうですか（前書き）

今回、結構時間。

鬼さんですか、そうですか

前回から二〇年という月日が過ぎた。・・・え？何でそんなに時が流れているかって？・・・ふっそれを気にしたらダメというものだ。

とりあえず、僕の能力？という物があることが判明した。その名も『人を和ませる程度の能力』・・・え？なにこれ・・・弱くね？まぁ、平和的でいいか。そして、結構、妖力？という物の操り方も覚え始めた。

そんな事よりも、もっと驚くべきものを発見した。それは人間の住む村だ。どうやら僕は、タイムスリップ？もしたみたいで、竪穴住居である。うん。初めて見たとき僕も驚いた。

「まぁ、人間に会いに行ってみるか・・・。」

そう言って僕は、四本足で人里へと走り出す。・・・あぁ、いまさらだけどなんか身体能力が凄いみたいで五十m三秒台で走れた。

「なにこれ？」

そう言うしかなかった。なぜなら、人里で暴れまわる一人の男性。年齢は・・・二十歳くらいだろうか・・・。周りの人間なんか、

「うわー。」

「に、逃げろ～！！」

こんな声上げて逃げ回っている。僕も逃げようかな～。ちょ、男の人こっち向いたけど・・・。

「お前は何者だ？」

ヤバイ。マジでヤヴァい。完全にこっちを獲物を見つけた目で見てくるんだもん。

「ニャア～。」

とりあえず、猫の振り・・・そうだ猫の振りだ。これこそ、逃げるための手段だ！！

「ごまかすな。妖怪。」

＼（＾０＾）／　オワタ

「あ、ばれた？」

「当たり前だ。鬼を見くびるなよ。」

ヤバイ睨みながら言ってくる。ハッキリ言って怖ぇ～。あぁ、そうだよ、僕は、チキンだよ！チキンで悪いか！！

「・・・獣がしゃべったら変だと思ってね。」

「獣？・・・まぁ、いい。俺は、鬼の神鬼戦真（しんきせんま）だ。お前も、名を名乗れ！」

「ごめん。名前無いんだ。種族で名乗ると『猫』まぁ、『猫又』だがね。」

僕は、クツクツと笑って見せた。それが気に入らなかったのか戦真はムッとしたがすぐに、

「『猫』？『猫又』？そんな種族、聞いたこともないし見たこともないぞ。」

「・・・は？」

怪しくなって周りを見渡してみると人間も首を傾げている。猫を見たことがない？そんな馬鹿な。・・・まぁ、いいか。

「それより、僕に何かようですか？」

「・・・とぼけるな。そんな妖力を持って俺の前に現れたということは分かっているだろう。」

「全然わかない。」

「・・・。」

ヤバイ。とぼけてみたら頭抱えられた。
「・・・。それだけの妖力を持っていたら、鬼である俺が戦いたくならない訳がないだろ？」
ニヤリと笑いながらこっちに尋ねてくる。
「つまり・・・。戦えと？」
「そのとうりだ。」
「あぁ～。空が青いな～。」
「てっ、おい。とぼけるな！！」
とぼけたら突っ込んでくれた。え、もしかしていい人！？・・・・妖怪か。
「・・・帰ってもいいですか？なんか、くる場所間違えたみたいなので。」
「逃がすとでも？・・・・てっ、おい！！」
とりあえず、にげてやったＺＥ☆三十六計逃げるにしかずってな。

・・・森の中・・・

「待てやコラー！！」
「待てと言われて待つやつがいるか！！」
「じゃぁ、逃げるな！！」
「同じじゃねーか！！」
そんなことを言いながら鬼から逃げるために僕は、絶賛逃走中である。あいつ速いし。僕に普通についてくる。てか、なぜこの状況で目の前に崖あるし！
「さぁ、追い詰めたぞ。おとなしく戦え。『猫又』とやら。」
「分かったよ！！戦えばいいんだろ！！」
「その通りだ。」

「いくぞ！」
勢いよくこぶしが飛んでくる。僕は、紙一重でそのこぶしを避け

た。こぶしが地面に当たるとそこがクレーターのようになっていた。
「そんな威力ありかよ・・・。しかも、能力もちだな？」
「ほう、よく分かったな？その通り、俺の能力は『力を調整する程度の能力』だ。」
「チートだな。」
さて、どうしよう？

ー数刻後ー

やぁ、まだ交戦中なんだ。でも、勝つ方法が浮かんだ。
「いつまでも避けてるんじゃ勝つことは・・・グフ。」
とりあえず、一蹴りしてやった。そして、妖力弾を放つ（もちろん手加減なしの）。
「そんな物・・・。く・・・。」
命中した瞬間戦真は倒れ掛かった。その瞬間にぼくは、一番大きな妖力弾を頭上に作り出す。
「・・・くっ、まだ終わら・・・『いや、終わりだよ。』・・・な！？」
気づいたところでもう遅い。僕は、すでに妖力弾を投げていた。
「えっ、ちょ！？」
命中した。

鬼さんですか、そうですか（後書き）

今回無理やり感が半端じゃない・・・。

ぶんぶんぶん。鬼が飛ぶ（前書き）

一日、三話投稿はきついですね。明日から学校・・・ウボァ。

ぶんぶんぶん。鬼が飛ぶ

・・・とある洞窟内・・・

side戦真

「ん・・・ここは？」

そんなことを言いながら目覚めた俺は、戦真だ。今は、見慣れない洞窟の中にいる。とりあえず言えるのは、先ほど戦った『猫又』とか言ったか？あいつが運んでくれたのだろう。それを結論付けるように近くの岩の上に寝ている。力が強いのになぜ、奴は人の形をしていないのだろうか？この俺は、妖怪の部類では強い部類に入る。まぁ、種族というのもあるが・・・。それなのになぜ？

「ん、ん～。」

奴が伸びをした。可愛いと思った俺は間違っているだろうか。

「お！起きたのか？」

「あぁ。」

「よかったな。傷も癒えたみたいだし。」

そう言って笑いかけてくる。

「・・・なぜ？俺を殺さなかった？」

「え？あぁ、理由がないからな。それに、殺すとかそういうの嫌いなんだよ。」

「・・・。なるほど。」

まったく不思議なやつだ。妖怪の筈なのに殺しを嫌うとは・・・。

「そういえば？なぜ僕に戦いを挑んだ？鬼の本能とは別の理由があるんだろ？」

「・・・あぁ。この山の丁度上くらいに鬼たち住んでるんだよ。だが、そこには鬼神がいない。そこを俺が力を示して鬼たちをまとめようと思ってだな・・・」

「で、妖力のある僕を倒してその材料にしようとしたわけだ。」
「あぁ・・・。」
「まぁ、やりたいのならその鬼たちを倒してお前がなればいいじゃん。」
「・・・は？」
「だから、お前やりたいんだろ？ならやればいい。」
「だが、一番力の強い者が弱い者を導くのが当たり前だろ？お前の方が向いている。」
そう、俺に打ち勝った『猫又』の方が向いてるんだ。
「僕は・・・お断りだね。頼まれても。」
「な！？・・・。」
信じられない。なぜだ？普通は誰もがなりたいものじゃないのか？
「僕には向かないよ。・・・そんな役。」
「そうか・・・。よし！なら俺がやるしかねぇ～！！」
もう、いろいろと吹っ切れた。

戦真ｓｉｄｅｏｕｔ

猫又ｓｉｄｅ

一言言える。なにこれ怖い。今の状況、戦真が「俺がやるしかねぇ～！！」→山を登る→鬼たちのところに到着→俺がこの山の頭になる！→鬼さん達がキレる→「なんじゃい、我！寝言は、寝てから言え！！」→戦真がキレる→にらみ合いが始まる←今この状況
完全な一触即発の状況。
「待ちな！！」
「「「「「？」」」」」
「あんた見ない顔だね・・・。どこの誰かも分からん鬼にこの山を任せられるか！ここの鬼全員に勝ったら認めてやるよ！！」
女性の鬼がそう言い放った。

「いいだろう。それで、認めてもらえるならな！そのかわり！雑魚どもは、こっちの『猫又』が相手をする。そして、一番強い奴が俺とやる！どうだ！」

「チョイ待て！何で僕まで戦うことになってんだ！？」

「お前とて戦いたいだろう？妖怪ならな？」

「だから、言ったけど。僕は戦が好きじゃないの！分かった！」

「いいだろう。私がお前の相手だ。ほかは、そこのひょろいのをやっちまいな！！」

「「「「おう！！姉さん！！」」」」

怒ってもいいよね？

「くたばれや！！」

そんな事言って襲い掛かってくる鬼が一匹。

「くたばってたまるか！」

「ウボァ！」

ヤバイ。蹴ったら吹っ飛んだ。

「全員でかかれ！！鬼の勇猛さを見せる時だ！！」

「「「「「うぉ～！！！！！」」」」」

「はぁ～。」

そうため息を吐いて。高速で走りながら確実にけりを入れていく。蹴りだからどんどん鬼が吹っ飛んでいく。よーしあれ歌うぞ！

「ぶん、ぶん、ぶん。鬼が飛ぶ。」

「グヘ！」

「オブ！」

「猫の周りに鬼が～たかるよ。」

「グア！」

「チョブ！」

もうこの時点で鬼の数は残り一匹になってた。

「ぶん、ぶん、ぶん。鬼が飛ぶ！」

「ハガ！」

最後の鬼を蹴り飛ばした後、僕は
「エイドリアーン！」
と叫んで、腕・・・前足両方を空に向けて突き出した。

『猫又』ｓｉｄｅｏｕｔ

「終わったみたいだね。こっちも始めようか。」
「あぁ。」
「私は紅蓮花歌（ぐれんばなか）！この山の鬼を代表してあんたの決闘に受けて立つ！！」
「俺の名は神気戦真！決闘を申し込む！！」

・・・夜の山・・・

「戦真見事な戦いだったね。」
「てっ、見てたんかい！」
そんな会話をしながら鬼＋猫又一匹は宴会中である。ちなみに主人公はお水である。
「それにしても、あんたの名前は？鬼を一人で蹴散らす妖怪の名を聞いてみたいんだよ。」
「え？僕の名前？」
「こいつには、名はないらしい。」
「は？こんなに強いのに名前がない！ウソだろ？」
紅蓮は信じられないといった表情で主人公に尋ねる。
「僕の名前は・・・ウカノ・・・だ。」
「な！？お前名前無いって！！」
「いや、ゴメン。前は嘘ついてた。（今適当に考えただけなんだけどね・・・。）」
「そうか、ウカノだね。私は紅蓮花歌て言うんだ。よろしく頼むよ。」

「よろしくね。僕の二人目の友達。」
「「友達？」」
「うん。だってここまで触れ合いを持ったら友達でしょ？」
「一人目は？」
戦真は気になって聞いてみた。
「もちろん、戦真・・・君だよ。」
「そうか。」
こうして、『猫又』改め『ウカノ』に二人の友達ができたのであった。

ぶんぶんぶん。鬼が飛ぶ（後書き）

きつい・・・。

新たな能力と、天狗からの文（前書き）

どうも。霧夜です。昨日投稿し始めたばかりなのに、お気に入り登録五名、総合ユニーク数三百四名。このような小説を読んでいただきありがとうございます！これからも、受験に負けずに頑張って投稿していこうと思うのでこれからもよろしくお願いします。

新たな能力と、天狗からの文

ウカノｓｉｄｅ

やぁ、猫又改めウカノだよ。今日は僕から重大な発表があるんだ！実は、曲の記憶と歴史の記憶が戻ったんだよ！・・・うん。まぁ、必死になって覚えた曲の歌詞とかが思い出せてよかったと思ってます。さて、こんなことを言っていますが・・・実は今、さんの膝の上にいたりする。というか抱かれてる。

「・・・ねぇ・・・花歌？何で僕は抱かれているのでしょうか？」

「ん？そうだね～。それはあんたが可愛いからじゃないかな？」

いや、なぜそこを疑問形で答える。くそ！疑問形に疑問形で返す新手の嫌がらせか？畜生！！

「「「「「「・・・姉さん？次俺達にも抱かせてくださいよ？」」」」」」

「いや、お前たちもか！？というか、許可とるやつ間違えてね？それ普通僕に聞くよね！？」

「・・・いいだろう！あと、半刻後にな！！」

「「「「「「は、半刻後！！そりゃねーよ！姉さん！？」」」」」」

「いや！お前が答えるな！！しかも半刻後ってなげーな、おい！！」

「グハ！」

とりあえず、花歌にドロップキックをお見舞いして抜け出した。

あれから、もう二十年はたつけど毎日がこんなんだった。え？時間が飛びすぎ？・・・気にしたら終わりだ。

そして、僕もこの二十年間何もしてなかったわけじゃない。ちゃんと修行してた。もう妖力も大変な量になったしね。あ、あと、僕

にはもう一つ能力が備わった。『式を操り、司る程度の能力』つまり、式を操ることもできれば、司ることもできるという何ともチート級の能力である。まぁ、それで試しに式神を作ったわけだけど・・・。正直に言って作りすぎたｏｒｚ調子に乗って作ってたら百隊あまりの式神ができてしまった。ちなみに、妖怪を式にしたんじゃないよ？紙を使って作った式神だよ？僕の妖力を注ぎ込んであるのに姿は人間の少女である。違うところと言えば尻尾が二本と、頭にある猫の耳である。

「なぁ？ウカノ？」
戦真が聞いてきた。
「なんだ？戦真？」
「この式神？というのかは・・・見ていていいものではないな。」
戦真の意見もごもっともだ。普段は札にしてあるが一度出すとすべて同じ姿をしている。また、心というものがない。元が一枚の札だからだろうか？でも、一体一体が高密度の妖力弾による弾幕を張れるのでこれを突破できる妖怪は、僕の知る中では戦真と紅花ぐらいだろう。式を司るためだろうか？最近計算に強くなったような気がする。元いた場所なら余裕で数学のテスト百点だっただろうな・・・。畜生！！

・・・三日後・・・

「あぁ～。平和だ。」
そんなことを呟いてみた。あれから三日たったがこの山は何も起きていない。要は、平和すぎて暇なのだ。・・・いかん！妖怪にとって暇は禁物と戦真と花歌が言っていた・・・気がする。
「・・・そうだ！久しぶりに人里を見に行ってみるか！」
人里とは、前に戦真が暴れていたあの里である。久しぶりと言ったけど実際、二十年もたってるんだよね。妖怪だと時間の感覚がお

かしくなるみたいだ。

「ウソだろ・・・おい。」

僕は自分の目を疑いたくなるような光景を見ている。なんとあの里がものすごく発展してる。前は、縄文時代くらいだったけど・・・。今は、明治くらいになってる。・・・おかしくね？普通に考えてたかが二十年でここまで発展する文明は見たことも聞いたこともない。・・・いったいどうなってんの？まぁ、いいや、戻ろう。

「おい。ウカノ大変だ！すぐに来てくれ！」

戦真が普段では考えられないほどに慌てて僕を呼びに来た。

「いったい何事？」

「詳しい話は後だ！とにかく来い！」

それで連れられてきたわけだが・・・。みんな難しい顔してる。

「いったい何があったんだ？」

「・・・実はな・・・。天狗共からこんな文が届いた。」

花歌が表情を変えずに渡してきた。

「どれどれ・・・。」

―鬼どもへ―

本日より七日後。そちらの山をもらいに行く。こちらは、白狼天狗から大天狗までの全兵力を引き連れて行く。その数は、貴様ら鬼を上回るだろう。降伏するのなら命まではとらん。早急に降伏せよ。

―天魔―

「つまりは、天狗が攻めてくるということか・・・。」

「その通りだ。」
僕の質問に花歌が答えた。
「だがな。我らとて腐っても鬼だ・・・。だが、天狗も強い。正面から突っ込んでも数に負けるだけだ。」
戦真が言わんとしてることは分かった。
「つまり、鬼の戦い方を捨てずに天狗に勝つための方法を考えろ・・・ということかな？」
「あぁ、すまんが頼めるか？」
「まぁ、友達二人からの相談だしね。それにもう浮かんだよ。」
「「え？」」
フッフッフ。式に強いということは戦略も練りやすいのだよ。
「僕の考えは、前線に僕の式神を五十ずつの計二列に振り分けて配備。この式神の弾幕で敵の大半を倒して数を減らす。それでも突破してきた天狗たちを、鬼と僕が全力を持って排除。天魔は最後に突っ込んでくるだろうから、花歌、戦真、僕がそれを倒す。というものだよ。」
「・・・なるほど。確かにそれならいけるかも知れないね。」
紅花がそういうと周りの鬼たちも刻々と頷く。
「しかし、問題が一つある。最初から式神を配備していたら天狗たちは対策を練ってくるぞ？・・・そこはどうする？」
戦真の意見は、もっともだ。敵に最初から戦力の配置を知られたら自分たちは負ける気ですよ〜。て言ってるようなもんだ。
「大丈夫。まず二段に分けて、接触式の結界を張ってそれに接触したとたんに式が起動するようにしておくから、天狗にはただの神が大量においてあるようにしか見えないはず。」
「・・・それならいけそうだ！」
「よ〜し！全員！戦に備えるよ！！」
「「「「「おぉ〜！！」」」」」

新たな能力と、天狗からの文（後書き）

次回は、天狗との戦いになると思います。誤字脱字などありましたら気軽にお寄せください＾＾また、感想や、質問、コメントはできる限り返答できるようにしていきたいと思います。

天狗ＶＳ鬼猫大戦！ウカノ覚醒！（上）（前書き）

皆様の応援のおかげで、休日は三～四話投稿できている僕がここにいます。
皆様本当にありがとうございます。これからもよろしくお願いします。

天狗VS鬼猫大戦！ウカノ覚醒！（上）

ウカノｓｉｄｅ

やぁ、最近やたらとｓｉｄｅが多いウカノだよ。実は、今天狗の使者が来てるんだ。うん。本当、この時代？なのかこの世界なのか分からないけど女子率高いな～いや～ホント。肩身が狭すぎる。

「・・・ということは、降伏はなされないと・・・？」

「我ら鬼は、プライドも高くてな。降伏などせん！」

「・・・後悔しても知りませんよ？」

天狗の使者はそう吐き捨てると飛び去って行った。

「さぁ！戦の始まりだよ！！」

「「「「うぉ～！！やってやるぜ～！！」」」」

「「「「鬼の恐ろしさをみせてやろうぜ！！」」」」

「「「「おぉ～！！」」」」

うん。とりあえず言えることが一つ。鬼さんがたテンション高すぎ！やかましい！！

ウカノｓｉｄｅｏｕｔ

「そうか。降伏しないか。」

「はい。天魔様。」

天魔を前に先ほど鬼たちのもとに使者としてきた天狗が報告した。

「うむ。ご苦労であった。下がれ。」

「はい。」

「戦の時がやって来たぞ！鬼どもに我らの強さを思い知らせるのだ！！」

「「「「「「「「「「応！！」」」」」」」」」」

そう反応して白狼天狗を前線に鴉天狗、最後尾に大天狗という編成で天狗たちは飛び立った。

「・・・何か妙ですね・・・。」

そう言うのは鴉天狗のリーダーでもある射命丸由紀(しゃめいまるゆき)である。

「何が妙なんですか？由紀様？」

由紀の部下でもある白狼天狗の犬走楓(いぬばしりかえで)である。

「・・・ここまで来ているのに攻撃してこないことがです。」

「・・・あ！確かに・・・ここまで侵入しているのに迎撃も何もないですね。」

「えぇ、妙です。」

そんなことを言いながらも天狗たちは進んでいく。しかし、そこであるものが作動した。いたる木々や、岩に張られている札が輝く。そう。天狗たちは見事罠にかかったのである。

「な！？いったい何が？・・・え？」

そう。天狗たちは周りを猫のような少女たちに囲まれていたのである。

「な！？・・・あなたたちはいったい？」

「「「「「我らは、主ウカノ様の式。これ以上お主達は通さぬように命じられている。」」」」」

そう言うと、ウカノの式神たちは一斉に弾幕を張り始める。それは、もう高密度をとうり越した、超高密度弾幕であった。そうすべての者を通さないと言っているような弾幕の雨である。

・・・数刻後・・・

「・・・。最前線の式が全滅した。」

「な！？本当かい？」

「・・・本当なんだな？」

全員が固唾をのんでウカノの返事を待った。
「あぁ、でも白狼天狗はほぼ全滅。鴉天狗にも中規模の被害が出てるし、大天狗にも多少なりとも被害が出てる。」
「次の防衛線でどれだけやれるか・・・だな？」
「・・・あぁ。」

「由紀様・・・。さっきのはなんだったのでしょう？」
「分かりません・・・。倒すと煙と共にただの紙になりましたし・・・。仲間がやられてもまるで動じなかった。まるで、そう、ただ命令に従って動くだけのような・・・。そんな感じでしたね・・・。」
楓と由紀は思い出して身震いした。
「で、でも。もうあんなの出てきませんよね？」
「おそらくね。」
そんな事を言っていたが、それは普通のようにその言葉を裏切った。先行している白狼天狗が結界に触れたのである。広がるのは光。そして、さっきの悪夢であった。
「・・・きついですね・・・。」
「ですね・・・。」
また先ほどと同じ数の式神が天狗を包囲したのである。

・・・数刻後・・・

「ついに、突破された。」
「来るのか？」
「いや。白狼天狗は一匹を除いて全滅。鴉天狗も大損害。大天狗も中規模な被害を追ってるよ。けがしたやつを後方に下げたりするのに全員が動員されてる。今戦えるのは天魔ぐらいだろう。」
「そうか・・・！？なんだ！この妖力は！？」
鬼たちは全員がその妖力のが放たれている方を向くとそこには天

魔の姿があった。
「まさか我が種族をここまで追い込むとはな。」
さらに放たれる妖力が増える。数人の鬼は気絶したり後ずさりし始めている。戦真でさえ冷や汗を浮かべている。しかし、花歌は動じていない。
「花歌。お前スゲーな。」
「ん？・・・いや、今は、能力で動じていないように見せてるだけだよ。」
「花歌の能力？」
「あぁ、私の能力は『動じない程度の能力』だよ。」
「え？なにそのチート。」
「ただ、限界があるみたいだね・・・。」
花歌はうっすらと冷や汗を浮かべていた。
「あの、式とかいうやつの主はいったいどいつだ？」
天魔が聞いてくる。
「・・・僕だ。」
「な！？」
天魔は驚いた。こんな小さな生物が本当にあの量の物を操っていたのかと。しかし、ウカノの妖力を感じた瞬間、天魔の疑問は吹き飛んだ。
「・・・なるほど。確かにお主の妖力は並外れのようだ。」
「ほめ言葉として取っておくよ。」

天狗ＶＳ鬼猫大戦！ウカノ覚醒！（上）（後書き）

下に続きます。書いてたら長くなってしまった。ｏｒｚ

天狗ＶＳ鬼猫大戦！ウカノ覚醒！（下）（前書き）

今回で、天狗ＶＳ鬼猫大戦！は、終了となります。無理やり＆二次創作要素が満載です＾＾；

天狗ＶＳ鬼猫大戦！ウカノ覚醒！（下）

「でだ、僕に何かよう？」
「ククク。な～にあれほどの従者を持つやつがどんな奴かと思ってな・・・。」
天魔はそういうとウカノに殴り掛かった。
「ク！？」
だが、ウカノはすんでのところでその打撃を交わした。
「・・・ほう。まさか避けるとはな・・・。」
「・・・マジかよ・・・。」
天魔が殴った部分にはクレーターができていた。

「くぁ・・・。」
あれから、一刻ほどたったが状況はウカノが不利になっていた。
「どうした？この程度なのか？」
「ち、あんたは化け物だよ。」
ウカノはすでに肩で息をして、身体じゅうを傷まみれにしているのに対して、天魔はまだ身体に汚れを付けている程度でまだ余裕の表情をしている。
「・・・では、次できめさせてもらおう。」
天魔はそう言い放つと、大型の妖力弾を大量に構成する。
「な！？・・・天魔までつかえたのかよ・・・。」
「ふ、儂を誰だと思っておる。天狗の長の天魔じゃぞ。これくらいできて当たり前じゃ。」
ウカノしかまだ使えない筈の妖力弾を天魔は軽々と使っていた。
「喰らえ！」
天魔がそういうと大量の妖力弾がウカノに向かっていく。
「ちっ！？」
ウカノはこの体力では避けるのは不可能と判断し、即席の結界を

張った。が、天魔の妖力弾は軽々とその結界を破ってウカノへと飛来する。
「・・・。化け物・・・。」
ウカノがそう言った瞬間ウカノに妖力弾が殺到した。その時ウカノは、意識がブラックアウトした。

天魔ｓｉｄｅ

「なんだつまらん。この程度か？」
儂はそう言いながらウカノという獣のような妖怪の近くに降り立った。
本当につまらない。こいつなら、普段仕事ばかりで暇な儂を楽しませてくれると思っていた。妖力も普通ではないし、鬼と普通に接する妖怪だ。だが、その期待は一瞬で裏切られた。奴の蹴りは、鬼を吹き飛ばすには十分だろう。だが、『ありとあらゆる風を操る程度の能力』を持つ儂にはそんな蹴りなど、突かれているようにしか感じなかった。
儂は、力尽きかけているウカノとやらに、儂の自慢の杖・・・まぁ、下の先端が尖っているものだが、それを振りかぶった。
「ふん。お前なら儂を楽しませてくれると思ったが・・・。どうやら見当違いだったようだ。逝け！」

天魔ｓｉｄｅｏｕｔ

戦真ｓｉｄｅ

「ふん。お前なら儂を楽しませてくれると思ったが・・・。どうやら見当違いだったようだ。逝け！」
そう言いながら天魔が杖の尖った先端をウカノに突き立てようとする。俺の友達に向けて・・・。

「やめろー！！！！」
俺は、無我夢中で天魔に殴り掛かったが、
「お前は黙っておれ！」
「グホ・・・」
天魔の持つ杖が突如横に振られて俺は吹っ飛んだ。
「ふん。口ほどにもない。」
天魔がそういうと
「あんたにウカノはやらせやしないよ！！」
花歌も突っ込んでいった。
「お主もじゃ！！」
「な・・・！？」
花歌も俺と同じように吹き飛ばせれて、俺の近くに転がってきた。
「ふん。では、もう一度・・・。」
今度こそだ・・・。俺たちの前から友達が消える。花歌もそう感じているのか、泣いていた。
「「ウカノ～！！」」
俺と花歌はそう叫んでいた。もしかしたら目覚めてくれるかも知れない・・・。そう思って。

戦真ｓｉｄｅｏｕｔ

「「ウカノ～！！」」
戦真と花歌がそう叫ぶと、ウカノの体が輝きだした。
「「「な！？」」」
その場にいた天魔、戦真、花歌は一斉に驚きの声を上げた。
本の数秒輝いたウカノの体があった場所には、白い髪の毛、白いワンピース、頭にある白い獣の耳、少し長い二尾の尻尾、普通よりも白い肌の十歳くらいの少女がそこに立っていた。その瞳は両目のとも真っ赤であった。
その少女は、とぼとぼと、まだ立って歩き出したばかりの子供の

ように歩いて倒れている二人のもとへとやってきた。天魔は驚きのあまりかずっとポケーとしている。
「「ウカノ・・・なのか？」」
戦真と花歌はそう尋ねたが、その少女は二人の顔を覗き込み傷を確認し始めた。

「・・・はっ！？・・・おい！貴様！！」
しばらく、驚きのあまりボケーとしていた天魔は我に戻り、その少女に声を荒げながら振り返った。しかし、少女はそんな天魔を無視し、なおも二人の傷を確認していた。
「無視するでないはー！！！！！」
そう言いながら天魔は殴りかかってきたが、その少女はその拳を受け止めた。
「な！何！？」
受け止められのに驚いた天魔は声を上げた。
少女は、天魔の方に顔を向けたが、その顔には怒りに燃える瞳と、どこまでも暗かった。
「あなたを……。」
「な、なんだ！」
少女は小さな声を発したが、天魔にはすべては聞こえてい無かったため声を上げた。
「あなたを、私の友達をこんなにしたあなたを絶対に倒す！！」
そう言うと、少女はその体からは思えないほどの怪力で天魔を投げ飛ばし、後を追ってひたすら殴る。
「これで！終わり！」
少女はそういうと上空に結界を張り、その結界に天魔を投げ飛ばした。天魔の体は結界に当たり、そのまま重力に従って落ちて行った。
少女は、めり込む形で地面で気絶している天魔を確認すると、地

面へと倒れた。

天狗ＶＳ鬼猫大戦！ウカノ覚醒！（下）（後書き）

最後の方・・・かなり無理やりすぎましたｏｒｚ
まだまだ、続くのでこれからも応援よろしくお願いします。

これから、どう生きて行こう（前書き）

はい。少し、スランプになりかけている霧夜です。でも、見てくださっている方々がいる限り書くのはやめられない。だけど、スランプ。ＰＣつけても、小説書くことぐらいしかやることがない。・・・いったいどうしようｗ

これから、どう生きて行こう

ウカノｓｉｄｅ

「・・・ここは？」
僕は、一体どの位寝てたんだろう？
「お！目覚めたかい？」
「う、うん。」
花歌だ。よく見たら戦真も、鬼もいる。そして、て、天狗！？
「・・・花歌？僕どの位寝てた？」
僕は、花歌に今一番気になることを聞いてみた。
「え？今日で五日だね。」
「・・・五日か～。・・・天狗がここにいるってことは？こっちは勝ったの？それとも負けたの？」
「こっちの勝ちだ。」
以外にも戦真が答えてくれたよ。へぇ～勝ったんだ。・・・ということは、
「じゃぁ、天魔には戦真か花歌のどっちかが勝ったんだ。どっちが勝ったの？」
「「「「「「「・・・。」」」」」」」
あれ～。おかしいな？僕は、意識失ってたんでしょ？なら、どっちかが勝ったんじゃないの？ちょっ、おかしな人を見る目でこっち見ないで。すごい傷着くんだけど・・・。
「何を言っている？天魔に勝ったのはほかでもないお前だぞ？」
「・・・え？」
戦真がおかしなこと言って来た。僕が戦って勝った？そんなわけないでしょ？僕は、気絶してたのにそんなことできるわけがないジャマイカ。とりあえず、周りを見渡すと鬼さん全員頷いているよ。・・・え？なにこれ新手の嫌味？それともドッキリ？

「・・・さては、みんなして僕を脅かそうとしてるんでしょ？分かってるよ。でも、僕はそんな事じゃ驚かいないよ？」
「・・・いや・・・。本当なんだが・・・。」
「・・・。え？」
どうやらマジのようだ。
「・・・天魔？戦真の言ってることあってる？」
とりあえず、天魔を見つけたから本人に聞いてみるのが速いか。
「本当の事だ。」
はい～？ヤバイ。みんなしてか・・・。
「それよりも驚いたことがあるのだが？」
「・・・なに？」
「「「お前・・・男じゃなくて女だったのか？」」」
「は～！？三人して何を・・・。」
あれ？そういえばなんか肩口や足元がスースーする・・・て・・・
「な、なんじゃこりゃー！！！！」
おかしいでしょ！いや、マジでおかしいって！何で猫じゃなくて少女になってるの？なにこれ？神様の嫌がらせか？それか夢か？どうか夢で逢ってくれ！
混乱し始めて僕は、走り出していた。とりあえず、あれだ、湖に行こう。湖に行けば落ち着けるはず！

ウカノsideout

「ど、どうしたんだ？あいつ？」
「さ、さぁ？」
戦真と花歌はそんな会話をしていた。叫んだあとすぐにウカノが走って逃げ出したからだ。
「ウカノのあの速さ・・・初めて見たな・・・。」
戦真がそういうのも無理はない。ウカノは、今までにないスピードで走っていったからである。

「それよりも、なぜ？ウカノは、女であることを隠してたんだ？」
完全に勘違いしている花歌が呟いた。
「・・・おそらく。奴は、遠い昔からこの世に存在していたのではないだろうか？そして、奴の強さゆえに利用されるかしたのだろう。そして、奴は、逃げることを選んだ。傷つけることは嫌だったのだろう。逃げるために、奴は、自分が女であることを隠し、あの獣の姿に姿を変えていたのではないだろうか？」
「確かに、天魔の言っている事なら説明がつく。」
「確かにね～。」
とんだ勘違いをしまくっている三人組である。

「どこに行ったのだろう？」
「・・・。だめだ。思いつかん・・・・・。」
「一番一緒にいた奴がこれじゃぁ・・・・。」
「仕方ないだろ！戦った後、助けてもら・・・・！？」
「この下の洞穴にいるかも知れない！」
「「ほ、洞穴！？」」
「俺があいつに手当してもらった穴が下の方にある！・・・・そこにいるかも知れない。」
「な、なるほど！・・・よし、天狗よ出発するぞ！」
天魔がそういうと、天狗が集まってきた。
「鬼も行くよ！！」
「「「「「「「「はい！姉さん！！」」」」」」」」
鬼も集まってきたわけだが、一人の天狗が幸せそうな顔をしている。
「ん？どうした？」
天魔が聞くと、一人の大天狗が
「パンツ、白であったな～。」
と言った。その瞬間その場は修羅場と化した。女性の鬼＋花歌＋戦真、天狗の女性陣が

「最低〜！！」
「不潔！！」
「片隅にもおけん！！」
と言いながらもう殴る、蹴るの暴行し放題。鬼の男性、天狗の男性陣＋天魔に関しては
「「「「「「「先こすったーふてー野郎だ！！！！！」」」」」」」
と言いながら暴行を加えるが、それを聞きつけた前者の女性陣＋戦真が
「「「「「「「「「「死に晒せ！！！！！！」」」」」」」」」」
と叫び、そのまま殴り合いが始まったのであった。

殴り合いに発展したそれは、一刻以上も続き、女性陣の勝利で終わった。理由は簡単である。残っていたウカノの式紙までも戦いに参戦してきたからである。だが、全員がボロボロであった。

「とりあえず、着いたぞ。」
鬼＋天狗は、ボロボロの体でその洞穴までやってきていた。
「よし、白狼天狗！中を調べてこい。」
天魔がそういうと白狼天狗たちが中へと入っていった。

「この中にはいません！」
白狼天狗たちが出て来て犬走楓がそう報告した。
「じゃぁ、どこに行ったんだ？」
「まさか？もう、このあたりにいないんじゃ？」
「・・・。それも考えられる・・・。」
「・・・女からの意見を言わしてもらうけどさ・・・。」
「「？」」
「こういう時は、自分を落ち着かせるという考えもできないかい

？」
「「どういうことだ？」」
「つまり、心を落ち着かせたりする場所にいるかも知れない。」
「そんな場所あったか？」
「水のあるあたりが怪しいんじゃないかい？」
「それなら、あるぞ！」
戦真が言った。
「この山の麓あたりに湖がある。」
「よし！全員行くよ！」

・・・湖・・・

「はぁ、このままどうしよう・・・。元々男だから女性はどんな時にどういう反応をするのかよくわかないよ・・・。」
ウカノは湖の畔でそう呟いていた。本当に悩んでいるためか耳が下を向き、尻尾も二尾とも地面についている。
「・・・僕はこれからどう生きて行けばいいのかな～？」
「今まで通り生きて行けばいいんじゃないか？」
「え！？」
ウカノが驚いて声のした方向を見てみると、鬼と天狗たちがいた。
「お前は、今まで通り生きて行けばいいんだよ。俺たちは、お前がどんな姿であれ受け入れるつもりだ。なぁ？みんな？」
「「「「「「「おう！」」」」」」」
戦真がそういうと、鬼と天狗が全員頷く。
「・・・ありがとう。みんな。」

これから、どう生きて行こう（後書き）

はい。やっちゃいました！！ｏｒｚ投稿スピードですが・・・今までよりも落ち込む鎌知れません。

女性として生きて行こう　都市へ（前書き）

今回もやっちまった感が・・・ｏｒｚ他の方の小説とかぶらないようにしたらこうなった。

女性として生きて行こう　都市へ

ウカノｓｉｄｅ

やぁ、みんな！ウカノだよ！あれから三日たったけど・・・。僕、今絶賛正座中なんだ。

「すいません。僕は、なぜ正座させられているのでしょうか？」

とりあえず、目の前にいる花歌に尋ねてみた。ほかにも白狼天狗の犬走楓？さんと、鴉天狗の射命丸由紀？さんにも囲まれています。

「ん？なぜか？・・・それはな、お前の口調の話でだよ。」

「く、口調！？」

「そうだ。せっかくきれいな少女なのに、その男口調では台無しじゃないか？だからだ。」

「「そうですよ！ウカノさん！」」

天狗少女もそんなこと言ってくるんだけどさぁ、僕男だよ！元！少し戻った記憶では、男の娘とか言われてたみたいだけどさぁ～。

「ちょっと、待って！僕の子の口調でもいいと思うんだけど！」

「僕と言っている時点でだ！」

え？なにそれ？まったく、この時代には『僕っ娘』という文化がないのか！世界中の『僕っ娘』に謝れ！！

「とにかくだ！お前には口調を改めてもらう！」

＼（＾０＾）／　オワタ

こうなったら、最終手段！逃げちゃえ☆

とにかくダッシュする。しかし、

《ガシッ》

「逃げられると思ったか？」

見事に花歌さんにつかまりました。

「テヘ☆ペロ」

・・・数日後・・・

やぁ、みんな。私ウカノだよ！ぅん。怖かったよ。花歌に口調が改めるまで出してもらえなかった。うん。もう、男のプライドとか全部捨てたよ。で、見事女性口調になった私です！そして、今の状況はと言いますと・・・。

「「「「「ウカノさん！！俺と付き合って下さい！！」」」」」」」

＜死に晒せ！！このロリコンども！！＞

と言いながら走って逃げています。いくら、女性口調になったからって男は好きになれません。なぜなら、私にホモ要素はないからだ。

あ！由紀さんに、楓さんだ！助かった。

「由紀さん！楓さん！助けて～！！」

「「な！？」」

うん。驚いてるのは分かるよ。

「「少し待っててください！！」」

そんなこと言ってとんでっちゃったよ！！あ！天魔だ！！

「天魔～！！助けて～！！」

「て！お前もかぃ！！」

「待っていたぞ！儂と付き合ってくれ！」

そんなことで、私は、敵を一人増やしてしまいました。

「「「「「待って～！！」」」」」

「待てるか！アホども！！」

そんなことでまだ逃げてます。こいつらヤダ！しつこい！！

「ウカノさ～ん！」

「ゆ、由紀さん！早く助けて！！」

「今行きます！！行くよみんな！！」

「「「「「応！！」」」」」

よかった！女性陣＋戦真を連れて、戻ってきてくれた。

うん。ただいま男どもがうちら女性陣に向かって絶賛土下座中だ。見事に、女性陣に男性陣はボッコボッコにされたからだ。もう、見てるだけだったけど状況は、「はは！見ろ！男どもがごみのようだ！はは！」という感じだった。あと、女性陣から聞こえてくる言葉も怖かった。

「男性は消毒だ～！！」

「死に晒せ～！！」

だのいろいろ聞こえてきた。

さて、あれから数刻後僕は、あの人里がよく見えるところに来ている。久しぶりにあの町の様子を見たかったんだ。でも、

「・・・どうなってんだこりゃ～！！」

そんな事を叫んでしまった。あの明治くらいの人里が、すでに未来都市になっていた。でも、私はそこに興味がわいてしまった。

「一回行ってみるか・・・。」

私は、その都市に走り出していた。

女性として生きて行こう　都市へ（後書き）

やっちまったＺＥ☆

まぁ、後悔していても始まらないのでこのまま進めていきます。次回！あの原作キャラが登場する予定です。

都市で会うのはえーりん先生（前書き）

昨日投稿出来ずすいませんでした。ｏｒｚ
ＰＣがネットにつながらないという訳の分からない事態が発生しておりました。また、時間の関係上、今日も一話しか投稿出来ずすいませんｏｒｚ

都市で会うのはえーりん先生

ウカノｓｉｄｅ

今、都市の外のところまで来てるんだけど・・・。入口付近に銃を持った兵士がいて入れそうにないな～・・・。どうしよう？

・・・少女考え中・・・

そう言えば！猫の姿に戻れたじゃん！何で、早く思いつかなかったんだろう。

―ポン―

よし。これで戻れた。あとは、この兵士さん達を何とかすれば・・・。ん？

「よし！お前はここに残って見張ってろ。俺は、無線で報告してくる。」

「了解！」

あ、一人離れて行った。・・・チャンスか！

ウカノｓｉｄｅｏｕｔ

ガサガサ

「誰だ！！」

そう言って銃を持つ男は音がした方向に銃口を向けた。しかし、

「にゃ～お」
出てきたのは、白い猫だった。
「なんだ、猫か・・・。」
そんなことを言っているが、この男、かなりの動物好きであった。
銃からマガジンを抜き、銃弾が入っていないことを確認すると
「ばーん！」
「にゃ？」
男は、その白猫（ウカノ）に声で発砲した。
「くそ！通常弾が効かないだと！なら、徹甲弾だ！」
「（なるほど。ストレスがたまってるのかな？それとも純粋な猫好きか？）」
「バーン！」
「にゃ～」
ウカノは、男の行動に付き合い、わざとやられたふりをした。
「よし。怪物を討伐完了、と。」
そんなことを呟きながら、男はウカノへと近づき、
「ありがとな。猫ちゃん。」
「にゃ～？」
あくまで猫として、答えてあげるウカノであった。
「おい！何やってるんだ？」
「あ！先輩。・・・実は、猫が。」
「猫？・・・可愛いな。」
「ですよね！」
この男の先輩とういう上司も大の動物好きであった。
「・・・感染症か何かにかかっているかもしれんし、八意先生のもとまで連れてってやれ。」
「はい！ありがとうございます。さぁ、猫ちゃん行くぞ。」
そう言って、その男はウカノを抱き上げて都市の中へと連れて行った。

・・・少女、兵士移動中・・・

「さて。八意様はいらっしゃるのかな？」
「ここにいるわよ。」
八意という少女は、その兵士の後ろに立っていた。
「あ、八意様。後ろにいられましたか。」
「えぇ、今帰ったところ。で、何の用かしら？」
「あ、この猫を見ていただきたくて。」
「・・・・・・。分かったわ。じゃぁ、預かるからあなたは配置に戻りなさい。」
「はい。お願いします。」
そう言ってその男は去っていった。
「さて。」

・・・少女、猫移動中・・・・

ウカノが連れてこられた部屋は、周りに研究材料が棚に所せましと並んでおり、同じく本まで並んでいる部屋だった。
「さて・・・。もう姿を現してもいいわよ？妖怪さん？」
「・・・。いつから気づいてたの？」
「そうね・・・。あなたを見てすぐかしら？」
「・・・なるほど・・・。」
そう言いながら、人間の姿になる。
「尻尾が二尾・・・。猫又かしら？」
「その通り。」
二尾の尻尾を揺らしながら、ウカノは言った。
「それで？私をどうする？どうせ、警報を鳴らすボタンか何か持ってるのでしょう？」
「・・・なぜそう思うのかしら？」
「様付で呼ばれるということは、偉い身分なんでしょう？それな

ら、そのくらい持っててもおかしくないよ？」
「・・・えぇ、その通りよ。でも、あなたをどうこうするつもりはないわ？・・・でも、名前を教えてもらえるかしら？」
「・・・ウカノよ。」
「そう。私は、八意××よ。」
「・・・いいにくい名前だね～。」
「そうね。・・・じゃ、永琳でいいわ。」
「分かった。八意永琳だね。よろしく。」
「えぇ、よろしく。」

都市で会うのはえーりん先生（後書き）

えーりん登場！次回は、投稿遅くなるかも知れません。・・・あ！明日テストや・・・。どうしようｗｗｗ（＾ｗ＾；）

月移住計画？（前書き）

投稿がかなり遅れてすいません。これからも、周一投稿が多くなるかもしませんｏｒｚ

月移住計画？

ウカノside

私は、あの一軒から永琳の屋敷にたびたび訪れるようになった。まぁ、暇つぶしということもあるけどほとんどが、手伝いかな？今日も永琳の屋敷に猫の姿で向かってる。

「お！この前の猫ちゃんじゃないか？」

「にゃ！？」

目の前に出てきた兵士・・・。どうやらあの時の兵士だったみたいだ。

「野良なのかな？」

「おい！何やってる！行くぞ！」

「あ、はい！じゃぁな。」

そう言うとその兵士は上司のもとに走っていった。大変だね～。軍隊は・・・。

―永琳の部屋―

「永琳いる～？」

「いるわよ。」

そうこの期間で永琳とは親友のような関係になった。それからは、いつものように永琳の手伝いをしていた。たまにゲテ物入れるもんだからもう吐き気がしてきた。

「ねぇ？ウカノ？」

「ん？」

たった今休憩中で永琳と共にお茶を啜っている。やべー。お茶ウ

マw
「どうした？」
「実はね・・・。私たち月に行くことになったのよ。」
「月！？」
うん。誰か今のは聞き間違いだと言ってください！・・・まぁ、私と永琳しかいないけど。
「えぇ、少し先にね。」
「何でさ。」
「・・・この都市の人々は寿命というのが嫌みたい。」
ため息を吐きながら永琳は言った。
「寿命の原因はこの地上にあふれる穢れが原因だと判明して、それからすぐに穢れの無い月への『月移住計画』が上層部で決定したのよ。」
「ふぅ～ん。」
まぁ、上層部の方々は頭がお花畑なのかね？そんなことを考えるとは・・・。
「それでなのだけど・・・。ウカノ、あなたも私たちと一緒に月に行かない？」
「うん。気持ちはもらうけど、超行きたくない。」
「そう。じゃぁ、聞くわ。どうやら妖怪たちはロケットを破壊するためにこの都市に攻め入ってくるらしいわ。ウカノ、あなたも妖怪の見方をする？」
「ん？・・・いいえ。私は永琳が脱出次第妖怪側に着くつもりでいるわ。」
「・・・。やはりそうなるのね・・・。」
「えぇ、だからあなたにこれを渡しておく。」
そう言って私は懐から球体上の物を差し出す。
「なにこれ？」
「まぁ、お守りみたいな物。これは、あなたが妖怪に襲われそうになった時に結界を張るための物。」

「ありがとう。大切にもらっておくわ。」
受け取ってもらえてなんとなく嬉しい。「いらない」とか言われたらすごい傷つく。
「じゃぁ、そろそろ帰るね。」
「えぇ、またね。」

月移住計画？（後書き）

永琳ファンの方々すいませんでした！ｏｒｚ
永琳の話し方分からんｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2275ba/

東方癒式猫

2012年1月14日20時50分発行